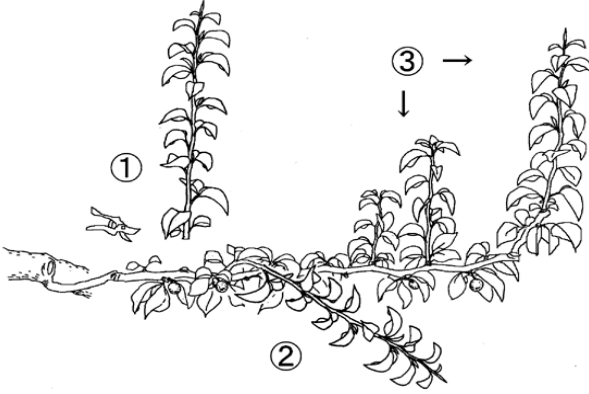


梅雨期における農業技術対策

令和 2 年 6 月 5 日
鳥取県農業気象協議会
とっとり農業戦略課

区分	予想される影響	対策の内容
水 稲	<ol style="list-style-type: none"> 1 日照不足や連続降雨、低温傾向による軟弱化、葉いもちの発生 2 冠水による生育抑制及び白葉枯病の発生 3 減数分裂期ごろの低温（17℃以下数日間）による不稔の発生（障害型冷害） 	<p>（事前対策）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 育苗箱施用剤にいもち剤を使用していない場合は、本田粒剤を散布する。また、白葉枯病防除対策として育苗箱施用剤を使用していない場合は、6月末までにオリゼメート粒剤等を散布する。 2 補植用の置き苗は葉いもちの発生源となるので早急に処分する。 3 排水路の清掃をして速やかな排水に努める。 4 山間部等低温の予測される地域では、あらかじめ深水管理ができるよう畦畔を高く補強する。 <p>（応急並びに事後対策）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 葉いもちが発生し、まん延が予想される場合には、速やかに治療効果のある薬剤を散布する。 2 低温傾向が続く場合は水温の上昇をはかるため、入水は夜間とし昼間は止水する。 3 幼穂形成期以降 17℃以下の低温となる場合は 10～20cm の深水管理を行う。
大 豆	<ol style="list-style-type: none"> 1 湿害による出芽不良、生育抑制 	<p>（事前対策）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 水田転換畑においては、額縁明きよを施工するとともに、水が停滞しないよう、必ず排水口に連結する。 2 排水が悪い地域では、高畝 2 条まき、または畝幅 3.3m 以内の広高畝 4 条まきとする。 3 種子水分を 14～15% に調湿すると出芽時の湿害を回避できる。 <p>（応急及び事後対策）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 冠水した場合は、一時的に畦畔を切って排水を促進する。 2 雑草の発生が多い場合には大豆生育期間中に施用できる除草剤を散布する。
果 樹	<ol style="list-style-type: none"> 1 滞水による根いたみ及び日照不足による落葉、果実肥大の停滞 2 長雨による防除の遅れ及び高温多湿による病害の発生 3 青ナシのアザ果の発生 4 傾斜園の土砂くずれ 	<p>（基本対策）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 排水の悪い園地では、対策として園内に暗きよ又は半明きよを設置する（秋に施工）。水田転換園では、外周の額縁明きよを施工する。明きよが崩れたり浅くなっていたら土をあげ排水を促すようにする。 <p>（事前対策）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 枝が混み合った防風樹を刈り込むとともに、草刈りを徹底し、園内の風通しをよくする。 2 排水溝の草刈り、補修、溝さらいを行い、地表水の園外への排出を促す。

区分	予想される影響	対策の内容
果樹 (続き)		<p>3 ブドウ等ハウス栽培では、雨中でも換気を行い湿度低下に努める（病害対策）。</p> <p>4 枝の発生が多く、混み合ったナシ園では、徒長枝を間引いたり新梢を誘引して果そう葉への日当たりを改善し、果実肥大と花芽分化を促す（図を参照）。</p> <p>5 長雨により病害が発生しやすいので、防除を徹底する。</p> <p>図 新梢管理の方法（「ゴールド二十世紀」の側枝の例）</p> <p>① 枝基部に立った強い徒長枝は切り取る。</p> <p>② 面に空いたところがあったら、新梢を倒してふさぐ。</p> <p>③ 枝先端部の新梢や弱い新梢は切ったり傾けたりしない。</p> <p>※徒長枝抜きや誘引は樹冠の中心部で行う。主枝・垂主枝の先端部には手を付けない（樹勢を強く保つため）。</p> <p>(応急対策)</p> <p>1 長雨が続く場合は、雨水の溜まりやすい部分に溝を掘り、地表水の園外排水に努める。</p> <p>2 病虫害の発生に注意し、防除を徹底する。降雨の合間を見ての防除であり、タイミングの見極めが難しいが、風の強い日を避け、周辺への薬液飛散に十分注意する。</p> <p>3 豪雨による流水が集中してテラスや斜面が崩れそうな場合は、土嚢を積んで補強する。</p> <p>(事後対策)</p> <p>1 ナシ黒星病、カキ炭疽病等の病害防除に努める。</p> <p>2 梅雨明け後の乾燥に備え、稲わらや山野草を用いて、株元のマルチを行う。</p> <p>3 テラスや法面の崩れたところは、早めに補修する。</p> <p>※梅雨入り後であっても晴天が続くようであれば、土壤の乾燥に注意してかん水する。特に苗木や幼木の水管理には注意する。</p>
野菜	<p>1 過湿による根いたみの発生及び生育停滞</p> <p>2 長雨による防除時期の遅れ及び高温多湿による病害の発生</p>	<p>(事前対策)</p> <p>1 地下水位が高く、水の停滞しやすいほ場は高畝栽培とする。</p> <p>2 水田転換ほ場の周囲に額縁明きよを施工し、水が停滞しないよう必ず排水口へ連結する。<u>特に白ネギは湿害を受けやすいので、排水対策を徹底する。</u></p> <p>3 スイカ、メロン等の切除したつるや摘果した果実は、病気の発生源とならないようほ場の外に持ち出し処分する。</p> <p>4 施設栽培は、雨天でも換気を行い湿度低下に努める。パイプハウスの周囲は明渠を設置し、雨水の流入を防止する。特に、傾斜上側のハウス出入り口は流入しやすいため、必ず設置する。ハウスの横側は古ビニール等を敷き、雨水の浸潤を防止する。豪雨によるハウス内への雨水の流入を防ぐため、周囲に明きよを施工し、雨水の流入防止と排水対策を行う。明きよは確実に排水口に接続する。</p>

区分	予想される影響	対策の内容
野菜 (続き)		<p>5 白ネギのべと病、さび病、スイカのつる枯病、炭疽病などが発生しやすいので、予防散布を徹底する。</p> <p>(応急並びに事後対策)</p> <p>1 浸冠水した場合には、ポンプ等による強制排水を行い、被害を最小限にとどめる。</p> <p>2 浸冠水又は土に埋まって回復の見込みのない野菜は整理・処分し、指導機関に相談のうえ、代替野菜を作付する。</p> <p>3 過湿により根いたみが発生しやすいので、水が引いたら葉面散布剤の散布や中耕を行い、草勢の回復を図る。ただし、葉面散布剤と農薬との混用は薬害を生じやすいので避ける。 また、根いたみにより吸水が阻害され、急激な気温上昇や日射量の増加で萎れるなど生育停滞が生じやすいので、天候に応じてこまめなかん水管理を行う。</p> <p>4 病害の発生が予想されるので、殺菌剤散布の徹底を図る。ただし、薬害が発生しやすいので高温時の散布は避ける。</p> <p>5 病害が発生した場合には、雨の止み間を見て繰り返し防除する。</p>
花き	<p>1 過湿による根いたみの発生及び生育停滞</p> <p>2 長雨による防除時期の遅れ及び高温多湿による病害の発生</p>	<p>(事前対策)</p> <p>1 露地栽培ほ場は、排水対策（高畝、明きょ）を徹底する。豪雨によるハウス内への雨水の流入を防ぐため、周囲に明きょを施工し、雨水の流入防止と排水対策を行う。明きょは確実に排水口に接続する。</p> <p>2 ハウスの周囲に古ビニールなどを敷き、ハウス内への雨水の浸潤を防ぐ。</p> <p>3 ハウスは雨天でも換気を行い、湿度低下に努める。</p> <p>4 キクの白さび病、花腐病、バラのうどんこ病、べと病、シンテツポウユリの葉枯病など急激に発生するものが多いので、予防散布を徹底する。</p> <p>5 敷わらやポリエチレンフィルムによるマルチを行い、強雨による土壌のはね返りを防ぐ。</p> <p>(応急並びに事後対策)</p> <p>1 浸冠水した場合は、早急にポンプ等で強制排水を行う。なお、用排水路からの逆流（バックウオーター現象）が生じた場合は、先ず、ほ場の排水口を塞いだ上で強制排水する。</p> <p>2 長時間冠水し、回復の見込みのない場合には植え替える（キクの場合8～10時間以上冠水すると危険）。</p> <p>3 過湿により根傷みが発生しやすいので、水が引いたら葉面散布剤を散布し、草勢の回復を図る。ただし、薬害を生じやすいので農薬との混用は避ける。 また、根いたみにより吸水が阻害され、急激な気温上昇や日射量の増加で萎れるなど生育停滞が生じやすいので、天候に応じてこまめなかん水管理を行う。</p> <p>4 病害の発生が予想されるので、殺菌剤の散布を徹底する。ただし、薬害が発生しやすい高温時の散布は避ける。</p> <p>5 病害が発生した場合には、雨の止み間を見て繰り返し防除する。</p>

区分	予想される影響	対策の内容
飼料作物	1 湿害による生育の停滞	1 水田転換ほ場では、冠水に備えて周囲に額縁明きよを施工し、水が停滞しないよう排水口へ確実に連結する。 2 冠水した場合は、出来るだけ早くほ場外への排水に努める。
家畜管理	1 高温多湿による生産量及び品質の低下	1 長雨のため畜舎が湿り、不潔になりやすいので、畜舎内に雨水や汚水が入らないように畜舎周囲の排水に努める。 2 飼料は変質、カビが発生しやすくなるので保管場所には留意する。また、食べ残しのないように適正給与につとめるとともに残飼は除去する 3 ハエ、蚊等の衛生害虫の発生が多くなるので、畜舎内外の清掃、消毒を励行し防虫対策を講ずる。

○気象庁から発表される気象予報を活用し、適切な作物管理に努めましょう。

- ・各府県の週間天気予報は、毎日11時と17時の2回発表されています。
- ・期間の1日目と2日目については随時最新の天気予報が表示されています。
- ・1か月予報は毎週木曜日14時30分、3か月予報は毎月25日14時頃発表されます。
- ・2019年6月19日から異常天候早期警戒情報が「2週間気温予報」及び「早期天候情報」に替わっています。2週間気温予報は毎日14時30分頃、早期天候情報は毎週月曜日と木曜日の14時30分頃に、特異な気象（大雨、突風、高温など）に関する注意情報、台風に関する気象情報は随時、発表されます。

気象庁ホームページ (<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>)

トップページ→天気予報、週間天気予報、台風情報、気象警報・注意報

防災情報のタブ→各種情報

各種データ・資料のタブ→農業気象→農業気象ポータルサイト

○近年、農作業中の熱中症による搬送者が多数発生しています。

- ・今後、気温の上昇とともに熱中症の発生リスクが高くなります。
- ・暑さを避け、こまめな水分補給を行うなど、熱中症予防の注意喚起をお願いします！
- ・気温・湿度が高い中でマスクを着用すると熱中症のリスクが高まるため、屋外での農作業などにおいて人と十分な距離(2m以上)が確保できる場合には、マスクを外して行うよう周知をお願いします。

○台風など降雨中の水路の見回りなども危険です。

- ・水路やほ場の点検、対策は雨降り前までに済ませ、降雨中の見回りや作業は控えるよう注意喚起をお願いします。